

べて典拠を調べ、版権の必要なものについては所蔵する図書館・博物館に問い合わせ、複製許可をもらい原画のコピーを送ってもらった。幸い *Charles Dickens by Pen and Pencil* (1889-91) および Charles Dickens 版全集は個人でもっていたので、これを存分に利用できたのは有難かった。版権には無頓着な執筆者もいて、複製許可をもらってほしいとお願いすると使用をあっさり引込めた。また、許可を得ていると主張する人には正確を期してその証明書の提出をもとめたところ、「こんなにいいのか」と驚きつつそれをもらってくれた。しかし「イラストは任せます」という人が多かった。イラストの拾い出しは容易な作業ではない。もっている蔵書をすべてひっくり返してふさわしいものを見つけ、また不鮮明なものとは相当に差し替えをおこなった。

『大事典』の函にはマクリースの描いた肖像画 (1839) を使うことにし、2007 年 2 月に Charles Dickens 博物館に問い合わせたところ、館長から「これは私の管轄外なのでどうしようもありません。National Portrait Gallery でもらってください」との返事があった。急ぎ NPG と連絡を取り、何とか 4 月はじめに許可と原画のコピーが届いてホッとしたが、出来上がってみればなんと肖像画は函の表のみに使用すると思っていたのに裏表紙と背中にも使われていて、大至急、変更に対する是正策を尋ねた。さいわい 1.5 倍支払えば許可できるとの連絡をもらって安堵の胸をなで下ろ

したが、それは 5 月 23 日、配本の 2 日前のことであった。

一方見返しの地図は *The Oxford Companion to Charles Dickens* とは異なり、これも資料の一部、つまりロンドン中心部の地名や街路名が読めることを念頭においた。柏書房の無償掲載許可には深く感謝している。いくつかの作品は個別に地図を作成する手間も省けた。今のうちに CD-ROM をていねいに剥がして地図が利用できるようにしておくとい。

5 月に日本英文学会が開催された折、南雲堂の展示ブースに『ディケンズ鑑賞大事典』が並び、内容の濃さと美しい装丁が参加者の目を引いた。以前から作りたいと思っていた本がようやくできあがり、支部記念事業の名にふさわしい貢献ができたことを素直によろこんでいる。編集委員会を代表し、5 年の長きにわたり努力をおしまず『大事典』を完成させた編集委員の皆さんに感謝しつつ、その功績を讃えたいと思う。

なお、CD-ROM に入れた地図は次の 3 点である。

1. *A Guide through London and the surrounding Villages* (London: M. J. Godwin, 1823)
2. *A Street Map of London 1843* (Devon, UK: Old House, [originally published by Chapman & Hall], 1992)
3. *Stanford's Library Map of London and its Suburbs* ([1862]; Suffolk, UK: Harry Margary [in association with Guildhall Library London], 1980)

The CD's CD-ROM Was Not Built in a Day.

松岡 光治

Mitsuharu MATSUOKA



今から 5 年ほど前のこと。『ディケンズ鑑賞大事典』刊行の話が出たとき、ディケンズの作品に出てくる人名や地名の数は膨大であるから、主要なものに限定せざるを得ないだろうと思った。だが同時にこうも考えた。『大事典』に CD-ROM をオマケとして付ければ、人名や地名は網羅できるし、ディケンズと交友のあった人々、分冊出版や年譜や系図といった表の形になるもの、すでに相当な分量となっている国内外のディケンズ関連の文献、クリックして拡大・縮小できる地図、これらも電子媒体としてならば、いくらかでも格納できるだろう、と。それで、編集委員会から付録 CD-ROM の制作を任された筆者は、さっそく計画・立案に取りかかった — 辛酸をなめることになるとは思ってもせずに。CD-ROM の中身は、表紙と目次を兼ねるトップページ (index)、使用方法などを書いた手引き (readme)、データベースの全てを収めたフォルダ (data) の 3 つにすることに最初から決めていた。ファイルの形式についても、テキストはコピー＆ペーストと改竄を防止するために PDF で、画像はウェブ上で標準的な JPEG または GIF にしようと

思った。

CD-ROM 制作班は『大事典』本体の執筆者になっていない若手からということで、春秋に富んでコンピュータ操作に優れた 5 人を登用した。目次は 9 つの項目からなる。それぞれの項目は CD-ROM 中の 9 つのフォルダ、すなわち「粗筋」(18 人の日本支部会員によるコラボレーション)、「人物」(宮丸裕二氏)、「地名」(西垣佐理氏)、「交友」(野々村咲子氏)、「分冊」および「年譜」(武井暁子氏)、「系図」(矢次綾氏)、「文献」(筆者)、そして「地図」(『大事典』に不可欠なデータということで、制作班とは別に尽瘁していただいた西條隆雄氏)に対応している。

さて、この種の大辞典に一般読者が求める情報の中でトップに来るのは、作品の粗筋ではあるまいか。ディケンズの研究者 (あるいは大学の先生) にとって決して愉快なことではないが、悲しいかな、これは否定しがたい事実であろう。ひょっとすると一般読者の場合だけではないかも知れない。ディケンズの作品論を書いた数年後に、端役の人物や細かい粗筋が思い出せなくなっているのは、50 歳になっても天命を知らない

筆者だけであろうか。日本支部のホームページには、その開設時からディケンズの15作品についての梗概（主な登場人物と粗筋）があったが、利用させていただいた宮崎孝一氏の『ディケンズ — 後期の小説』（英潮社、1977）の『荒涼館』から『互いの友』までの梗概はやや短いということで、今回の『大事典』で各作品を担当された中村隆氏（BH）、廣野由美子氏（HT）、田中孝信氏（TTC）、筆者（GE）、松本靖彦氏（OMF）には、新たに作品の詳しい粗筋を書いてもらい、それをCD-ROMに収めた。学問の本道から見れば、作品の粗筋を読むのは邪道かも知れないが、それならば翻訳を読むのも同断である。少子化の時代、ディケンズの面白さを知ってもらうためには、翻訳であれ粗筋であれ、とにかく読んでもらわねばならない。ディケンズ研究者を育てるのは大学でできるが、そのレーゾンデートルを世間に認めてもらうには、少しでも多くの人に関心を持ってもらわないといけないし、そのために何をしなければならないかを考える時が来ているように思えてならない。

今回の付録CD-ROMの制作で途轍もないエネルギーと時間が必要だったのは、宮丸氏担当の「人物」と西垣氏担当の「地名」である。「人物」で取り上げられたのは全部で2,410項目。複数の呼び方がある登場人物を一人と勘定しても2,057人。ここで数字として書けば一行で済む

が、ABC順と作品順の二つのファイルは、それぞれA4で169頁と180頁にも及ぶ。*The Dickens Encyclopedia* や *The Dickens Index* といった参考図書が利用できたとはいえ、これだけの人物をリストアップするだけでも気が遠くなる作業であるのに、宮丸氏は人物のすべてに日本語名、発音とアクセント、登場する（作品とその）章数、そして端役でないかぎりは詳しい説明をつけてくださった。聞いた話では、参考図書には少なからず間違いがあり、重複のない見出しを作るだけでも大変だったそうだ。固有名詞のカタカナ表記における問題は、『大事典』本体との統一の問題もあって編集長と意見の衝突もあった（決して言い争いではない）が、結局は編集長が宮丸氏の情熱にほだされて譲歩されたようである。宮丸氏の思い入れが強いのは発音表記で、例えば「M'Choakumchild, Mr. HT. マクチョーカムチャイルド [ムチョウカムチャイルド]」のように、原音のカタカナ表記の中で第一アクセントの部分を太字にするなどの工夫がなされている。発音に関しては7冊の発音辞典と4～5名のイギリス人にあたり、映画までチェックするという徹底ぶりである。また、主な登場人物は画像へのリンクが張っており、ユーザにとっては嬉しい限りだ。PDFファイルにリンクの設定するのは泥臭いマニュアル作業であったが、その苦労は一般読者には想像できないだろう。200枚になるまで画

像の収集とリンクの設定を手伝った筆者には、その苦労がよく分かる。この根気のいる仕事を宮丸氏は博士論文執筆と同時進行でしてくださった。しかし、スリアリーの親爺に言わせれば、これは宮丸氏にとって恰好の息抜きとなって、むしろ博士論文を捗らせることになる娯楽のようなものだったに違いない。

西垣氏が担当された「地名」も80頁を超える大変な作業であった。それぞれの地名がディケンズのどの作品の何章に出ているかについてのチェック — これには特に骨身を削られたようだ。地名に対応した画像は600枚で、これをすべて探し出すのに夏休みが完全に潰れてしまい、自分の仕事ができなかったと聞いている。版權がなくて画質も閲覧に耐えるものを見つける辛労は並大抵のものではなかったはずだ。複数の作品で使用されている地名に関しては（例えばSB, DC, LDなどで使用されている“Adelphi”では、具体的にどのような場面で使われているかが説明されているので）、その地名に関して作品ごとに何らかの共通点や相違点を見出すことができる。また、地名の歴史的由来も載せられているので（“Barnard's Inn”はGEで独身者用住居として使われているが、もともとは法学院の一つであったなど）、地名と何らかのテーマを絡めた研究をする場合には、とても役立つと思われる。英語の地名をカタカナで表記する際の苦しみは宮丸氏の「人名」と

同じであった。このような試練に両氏を耐えさせたのは、ディケンズに対する汲めど尽きせぬ愛としか考えられない。

野々村氏がABC順に並べた「ディケンズの交友関係」も、134人をリストアップして解説した34頁に及ぶ力作だ。こちらも76枚の画像ヘリンクが張ってある。クリックして現れた画像を見ていると、ディケンズと交友があったという理由だけで、私たちにとっても「互いの友」のように思えてくるから不思議である。この「交友」も前述の「人名」と「地名」も、そして後述の「分冊」と「年譜」も、PDFファイルの左端には「しおり」が付いている。ユーザ側の設定によっては「しおり」が左端に表示されない場合があるので、その時はPDFファイルの「表示」メニューから「ナビゲーションタブ」へ行き、「しおり」にチェックを入れる则表示される。一刻でも早く目的の情報をゲットしたい気短で性急なディケンジアンに対しては、この「しおり」の使用をお勧めしたい。

連載出版が多かったディケンズの情報として「分冊」（『大事典』本体に入れると20頁が必要）は欠かされた。武井氏がアバディーン大学で博士論文の追い込み中だったことを知っていた筆者は、よりよい博論を書いていただくためには宮丸氏のように息抜きが必要だろうと思って、何の躊躇もなく依頼した。シュリッケ先生のおられるアバディーン

大学の図書館には *Household Words*, *All the Year Round*, *Bentley's Miscellany*, *Master Humphrey's Clock* が全部そろっていて、先生の文献アドヴァイスもあって武井氏は「分冊」を即座に作成して送ってこられた。これでは息抜きにならないと思って「年譜」もお願いした。こちらは、すでに日本支部のホームページ上にあった小池滋氏の『ディケンズ — 19世紀信号手』（冬樹社、1979）の「ディケンズ略年譜」に、「政治・経済」「社会・文化」「文学・思想」の3項目を新たに追加したものである。

「系図」担当の矢次氏には「父方の祖先」「母方の祖先」「一親等の家族とホガース家」「子孫」という4つのエクセル・ファイルの作成を依頼した。「系図」の場合、すべてが1頁に収まらないうえユーザの腹の虫も収まらない。非常に見づらくなるからである。頭は少しも使わないのだが（とは矢次氏の弁で、そんなことは絶対ないと思うが）、細かくて神経を使う作業なので肩は凝るし、目はちかちかするし、ちょっと気を抜くと何処まで入力したのか分からなくなるといことで、これはとても息抜きになったとは思えない。「系図」の人名から「交友」の画像へリンクを張ればよかったのだが、これを失念していたのはすべて筆者の責任だ。申し訳ない気持ちでいっぱいである。

筆者の担当は「文献」。これは「ディケンズ文献一覧（洋書）」「日本で出版されたディケンズ関連図書」「デ

イケンズ作品の翻訳」「日本におけるディケンズ研究書誌」という4つのファイルからなっている。膨大な情報量にもかかわらず、基本的に日本支部のホームページ上で過去8年にわたって蓄積してきたデータをまとめ直しただけなので、大した作業ではなかった（長年の地道な努力が報われた）。ここ数年は「洋書の文献一覧」と「ディケンズ研究書誌」の更新を怠っていたので、これを契機に新しい情報を加えたが、前者の方はスクルージ並みのケナガイタチの目（ferret eyes）を持つという宮丸氏にチェックしてもらった。後者の方は、日本支部会員が書かれたディケンズ関連の最近の論文が、完全にデータベース化されていないので、不満がないわけでもない。今後のディケンズ研究者のためには、自動的にホームページに（少なくとも書誌情報としては）公開されるシステムを構築する必要があるようだ。

最後に、ディケンズを鑑賞するには絶対必要だが、『大事典』本体に入れてしまうと価値が半減してしまうロンドンの「地図」について、その担当を編集委員長の西條氏にお願いした。地図がよく見えるように拡大して『大事典』本体に入れるとなると、*London A-Z* のように数頁に分割しなくてはならない。また、むりやり1頁に収めると、街路名などは小さすぎて読み取れない。クリックするたびに目的地が拡大または縮小される電子媒体の地図こそ、今回の付録

CD-ROM で最も威力を発揮するものである。西條氏はロンドンの地図3葉、つまり1823年の *A Guide through London and the Surrounding Villages*, 1843年の *A Street Map of London*, 1862年の *Stanford's Library Map of London and Its Suburbs* の使用許可を取られ、電子化のために業者へ高額製作費を個人で払われた。ディケンズに対する愛情のなせる業である。これらの地図は高画質のJPEGファイル（それぞれ11MB, 13MB, 18.3MB）なので、クリックし続ければ、いくらでも目的地を拡大表示できる。拡大も度が過ぎるとぼやけてしまって見づらくなるが、下のように適度に拡大すれば、東の Russell Square と西の Gower Street, そして両者をつなぐ Keppel Street がはっきりと（ここではコピー&ペーストしているので幾分ぼやけて）見える。



「地図」の項目には「その他」もあって、ここには日本支部のホームページにある「Maps」のサイトが再現されており、様々な古いロンドンやディケンズ関連の地図へリンクが

張ってある。特に UCLA の疫学科がクリックابل・マップとして再現した「Map of John Snow's London in 1859」<<http://www.ph.ucla.edu/epi/snow/1859map/map1859.html>> の拡大した時の鮮明さは一驚を喫する。

この付録 CD-ROM のデータはコンピュータの CD/DVD ドライブから直接に読み出すことも可能だが、コンピュータに負荷をかけたり、動作を鈍くさせないために、全部を内蔵ハードディスクに保存してから使うべきである。使用するたびに出し入れするのは面倒だし、取り扱う時に傷がつくこともあるので、付録 CD-ROM はハードディスクに保存してから、バックアップ用に『大事典』本体の袋に戻すか、どこか別の場所に保管しておくがよい。データの総量はおよそ100MB。10年前のコンピュータであれば、ハードディスクに保存するのに1日かかったかも知れないが、性能がよい最近のコンピュータであれば、1分ほど待つだけでよい。ゴミ箱に入れて空にするには1秒もかからない。とはいえ、古代ローマと同じように、付録 CD-ROM は1日でできたわけではない。これは制作班の全員が長い時間をかけて作った愛（もちろんディケンズに対する愛）の結晶である。